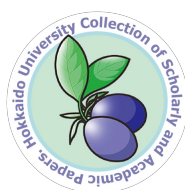




Title	結果構文と対応する英語の形容詞＋過去分詞型複合形容詞の分析
Author(s)	幸, 一尋
Citation	言語科学研究, 3, 1-18
Issue Date	2026-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99124
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99124
Type	journal article
File Information	03_03.pdf



結果構文と対応する英語の 形容詞＋過去分詞型複合形容詞の分析

幸 一尋

1. はじめに

本論は、英語の複合形容詞のうち、第一要素が形容詞、第二要素が動詞の過去分詞形をとる語（以下、「A-Ven 型複合形容詞」）について、対応する（形容詞）結果構文との関連から論じる。A-Ven 型複合形容詞には、(1) に示すような例があり、結果構文に現れる動詞句に対応する形容詞的受身（adjectival passive）として言及されてきた。しかし、この複合形容詞そのものを分析する研究は多くない。すべての結果構文が対応する A-Ven 型複合形容詞を形成できるわけではないのにもかかわらず（cf. (3)）、複合形容詞の形成条件は十分に検討されることがなかった。そこで本論では、A-Ven 型複合形容詞と結果構文との関連を整理するとともに、A-Ven 型複合形容詞の形成可否を観察し、その形成条件を明らかにすることを目標とする。

(1) A-Ven 型複合形容詞：

- a. thin-sliced ham
- b. a white-painted bench

(2) 結果構文：

- a. She sliced ham thin.
- b. We painted the bench white.

((1, 2) はいずれも Itoh (1985: 36) より)

- (3) a. *flat-watered tulips (Levin and Rappaport Hovav 1995: 45)
- b. *the thin-run pavement (Yamada 1987: 79)

- (4) a. The gardener watered the tulips flat. (Carrier and Randall 1992: 173)
- b. The joggers have run the pavement thin. (Carrier and Randall 1992: 217)

本論の構成は以下のとおりである。まず 2 節で A-Ven 型複合形容詞と結果構文の関連について言及している研究を整理したのち、3 節では影山（2005）による結果述語の分類を導入し、さらにこの枠組みを利用した Taniwaki（2006）による結果構文の主動詞と形容詞結果述語の複合形式（Resultative V-A combination, RVA）の分析と対照しながら、A-Ven 型複合形容詞の形成を分析する。その結果、A-Ven 型複合形容詞の形成可否には、動詞の項構造（自他）による分類ではなく、動詞が変化結果を含意するか否かによる意味的な分類に基づく説明が有効であることを示す。4 節はまとめである。

2. A-Ven 型複合形容詞と結果構文

本節では、A-Ven 型複合形容詞の複合を論じた研究を取り上げたのち、A-Ven 型複合形容詞と結果構文との関連に言及した研究を取り上げる。さらにそれらを整理し、動詞の項構造による説明では、形成可否を予測できない A-Ven 型複合形容詞が存在することを述べる。

動詞由来複合語の語形成を論じる Roeper and Siegel (1978) は、動詞 en 形に複合する要素として、形容詞は排除されるとする。すなわち彼らの分析によれば、A-Ven 型複合形容詞は形成することができない。

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| (5) a. worried-looking | *worried-looked |
| b. homegrown | *greengrown |
| c. They were caught naked. | *They were naked-caught. |
| d. They were seen angry. | *They were angry-seen. |
- (Roeper and Siegel 1978: 238)

一方、叙述表現 (predicative expression) を編入する動詞由来複合語を分析する Itoh (1985) は、その叙述表現が義務的な要素 (すなわち動詞の項) である場合、複合語に編入できないのに対し、義務的な要素でない (すなわち付加詞である) 場合は複合語内に編入できることを示している。

- | | |
|---|-------------------------|
| (6) a. 叙述表現が項である例 : | |
| i. We caught the girls naked. | *naked-caught girls |
| ii. We detected the boys drunk. | *drunk-detected boys |
| iii. His words drove the policeman mad. | *mad-driven policemen |
| iv. John sent his wife mad. | *mad-sent wives |
| b. 叙述表現が付加詞である例 : | |
| i. She sliced ham thin. | thin-sliced ham |
| ii. We painted the bench white. | a white-painted bench |
| iii. They freeze fish fresh. | fresh-frozen fish |
| iv. We caught a wolf alive. | a live[sic]-caught wolf |
- (Itoh 1985: 34-36)

両者の議論は対立するものではない。たとえば Roeper and Siegel (1978) は、動詞 en 形を含む動詞由来複合語について、副詞すなわち動詞句における付加詞に相当する要素が編入することは認めている¹ (e.g., *carefully-considered*, *well-written*)。したがって、Itoh (1985) の分析

¹ むしろ編入できるのは付加詞 (副詞や前置詞句内の名詞、受動文における by 句内の名詞など) に限られ、動詞の直接目的語にあたる名詞は編入できないとしている。

- | | |
|--------------------------------------|--|
| (i) a. *fish-fried (= fry a fish) | |
| b. *student-tested (= test students) | |
| c. pan-fried | |
| d. expert-tested | |
- (Roeper and Siegel 1978: 207)
- | | |
|--|--|
| (ii) a. *car-driven (has only agent reading, 'driven by a car') | |
| b. *president-elected (has only agent reading, 'elected by a president') | |
- (Roeper and Siegel 1978: 210)

は、Roeper and Siegel (1978) が複合語に編入される要素のうち、付加詞に相当する要素としては見逃していた形容詞について補うものと言えるだろう。

(6) の例のうち、(aiii, iv) と (bi, ii) は、それぞれ Huddleston (2002: 261-266) における “complex-transitives with obligatory resultative PCs [= Predicate Complements]” と “complex-transitives with optional resultatives” に対応する。どちらも目的語名詞句直後の形容詞が目的語の結果状態を表すが、前者は形容詞がなければ動詞の意味が変わってしまうため、この形容詞は義務的な要素と言える。一方後者では、形容詞（結果（二次）述語）は義務的でない (e.g., *Mary sliced ham in the kitchen.* (Itoh 1985: 24))。しかし、こうした結果構文と呼ばれるものの中でも、形容詞結果述語が義務的である場合がある。

- (7) a. They laughed themselves silly. (cf. *They laughed themselves.)
 b. The dog barked my mother awake. (cf. *The dog barked my mother.)
 (小野 2012: 90-91)

この対立は、動詞を見れば理解できる。他動詞である場合には結果述語がなくとも、動詞が目的語をとるので、文は成立する。つまり、結果述語は義務的でない。一方、動詞が非能格自動詞である場合には、単独では目的語をとらないので、結果述語を伴って結果構文としなければならない。つまり、結果述語は義務的である。Itoh (1985) が示した結果構文の例 (cf. (6bi, ii)) は、いずれも他動詞であるため、結果述語は義務的でない要素であった。

このように、結果構文において、動詞の項構造によって異なるとされる性質には、結果述語の義務性の他に、形容詞の受身の可否が知られ、これがまさしく本論で分析の対象とする A-Ven 型複合形容詞である。

Levin and Rappaport Hovav (1995、以下 L & RH) は、結果構文に対応する形容詞的受身として A-Ven 型複合形容詞の例を示している。結果構文の構造に関わる議論では、しばしば Ven-A 形式の形容詞的受身 (e.g., *the stomped-flat grapes*, **the danced-thin soles* (Carrier and Randall 1992: 195)) が着目されていた。しかし L & RH は、名詞の前に現れる場合、このタイプは複合語の主要部が左側に現れるため適切でないとして、代わりに A-Ven 型複合形容詞の例を挙げている。彼女らの観察によれば、結果構文の動詞が他動詞である場合には対応する A-Ven 型複合形容詞を形成できる (cf. (8))。また (9b) に示すように、非能格自動詞である場合には、対応する複合形容詞を形成できない。

- (8) a. Judy Ryan, Grandmother's servant-girl, always had my dinner ready for me on the white-scrubbed table that stood against the wall ... [M. Laverty, *Never No More*, 15]
 b. In those few undertoned words of Grandcourt's she felt as absolute a resistance as if her thin fingers had been pushing at a fast-shut iron door. [G. Eliot, *Daniel Deronda*, 311]
 c. There were extensive lanes of short-cropped, fortified-green lawns ... [J. Bailey, *Bagged*, 170-1]

(いずれも L & RH: 44 より、下線は筆者)

- (9) a. short-cropped hair, a clean-shaven face, thin-sliced cheese

(Randall 1981: 195)

- b. *blind-cried eyes, *the thin-run pavement, *a sick-laughed lady
(Yamada 1987: 79)

こうした観察から、単に結果構文といえども、他動詞の結果構文では、動詞直後の名詞句が動詞の項であるのに対し、非能格自動詞の結果構文では、名詞句が動詞の項でないという結論が導かれる。

ここまで説明してきた結果構文の性質を整理すると、次のように表すことができる。

- (10) (形容詞) 結果構文 (NP₁ V NP₂ AP) と動詞の項構造：

	NP ₂ が V の項である	AP が義務的である
V が他動詞	✓	NO
V が非能格自動詞	NO	✓

この整理と、先に示した Itoh (1985) の観察とを踏まえて、A-Ven 型複合形容詞の形成を考えると、動詞の項構造に基づいて、次のように非常にすっきりとした説明が得られるかもしれない。非能格自動詞の場合、結果述語は義務的なので、(6a) と同様に A-Ven 型複合形容詞は形成できない。一方、他動詞の場合、結果述語は義務的でない（すなわち、結果述語がなくても単純な他動詞文として成立する）ため、(6b) のように A-Ven 型複合形容詞を形成できる。

しかし、L & RH は “It is unclear to us why this option [= A-Ven 型複合形容詞] is not more generally available; most such structures sound unacceptable” (pp.44-45) と述べており、容認されない A-Ven 型複合形容詞の例として **flat-watered tulips* を挙げている。A-Ven 型複合形容詞そのものの分析には踏み込んでおらず、形成条件は未解決のまま残されている。

単に基体となる動詞の自他のみによる観点では、なぜ複合形容詞 *white-scrubbed* は許されるのに対し、**flat-watered* は許されないのか、という違いを説明することはできない。動詞 *scrub* と *water* はいずれも他動詞であって、項構造の点では違いがないと考えられるからである。したがって、動詞の項構造によらずに A-Ven 型複合形容詞の形成可否を説明することが必要であるが、そもそも A-Ven 型複合形容詞の形成を結果構文との対応に着目して包括的に考察した研究は見当たらない。そこで本論は、A-Ven 型複合形容詞の形成可否を観察し、その形成を動詞の項構造によらない形で説明することを目指す。具体的には、同じく他動詞を第二要素の基体としても許されない A-Ven 型複合形容詞があることを観察し、動詞が特定の結果状態を含意するか否かが A-Ven 型複合形容詞の形成可否にかかわっていることを示す。

実際に A-Ven 型複合形容詞の例を見る前に、次節では、分析で用いる枠組みとして、影山 (2005, 2007, 2009) が提案する結果述語の分類（含意的普遍性の階層）を導入する。さらに、それを利用して英語における動詞 + 形容詞の複合形式を分析した Taniwaki (2006) について説明する。

3. A-Ven 型複合形容詞と RVA

前節では、A-Ven 型複合形容詞の形成可否について、動詞の項構造に基づく説明では不十分であることを指摘した。本節では、A-Ven 型複合形容詞と共通点を持つ Resultative V-A combination (RVA) の分析 (Taniwaki 2006) と比較することで、A-Ven 型複合形容詞の形成条件を明らかにする。

RVAは(11)の下線部のように、結果述語が目的語の前に現れるものを指し、(12)に示すように対応する結果構文をもつ。

(11) RVA :

- a. John pushed open the door.
- b. John cut short his lecture.

(Taniwaki 2006: 251、下線は原文)

(12) 結果構文 :

- a. John pushed the door open.
- b. John cut his lecture short.

(Taniwaki 2006: 251、下線は原文)

またRVAは複合語と呼べる性質を備えており、例えば(13)に示すように、動詞と形容詞の間に副詞などの要素を挿入することはできない。A-Ven型複合形容詞も同様である² (cf. (14))。

(13) a. *He pushed {wide/halfway} open the door.

(cf. He pushed the door {wide/halfway} open.)

(影山 2001: 174)

b. *John drained almost dry his mug.

(cf. John drained his mug almost dry.)

(Taniwaki 2006: 255)

(14) a. *hard-{completely/very/almost}-boiled eggs

(cf. hard-boiled eggs, {completely/very/almost} hard-boiled eggs)

b. *red-{brightly/very/almost}-painted wall

(cf. red-painted wall, {brightly/very/almost} red-painted wall)

c. *clean-{carefully/very/almost}-wiped table

(cf. clean-wiped table, {carefully/very/almost} clean-wiped table)

d. *smooth-{recently/very/almost}-polished surface

(cf. smooth-polished surface, {recently/very/almost} smooth-polished surface)

したがって、RVAとA-Ven型複合形容詞は、①対応する結果構文を持つこと、②複合語であることの2点で共通している。このため、両者の振る舞いを比較することは、A-Ven型複合形容詞の形成可否を分析するのに有効であると考えられる。

² Quirk et al. (1985: 415)によれば、第一要素が形容詞・副詞、第二要素が分詞である複合語 (e.g., *hard-boiled*) に *very* が先行した場合、複合語全体ではなく第一要素のみを強調するような解釈が可能であるという。この観察は、この種の形式が語ではなく句としての資格を持つことを示唆するかもしれない。しかし Booij (2009) は語彙的緊密性について、語を規定するのは、その内部に他の要素を挿入できないという割り込み不可能性 (non-interruptability) であって、その内部構造にアクセスできないというアクセス不可能性 (non-accessibility) については緩めるべきだと主張している。この提案を受け入れると、A-Ven型複合形容詞は第一要素のみの修飾が可能であるという点でアクセス不可能性を示さないが、(14) のとおり形態的に他の要素を挿入することができないという点で割り込み不可能性を示すので、語としての資格を持つと言える。

Taniwaki (2006) は、この RVA を分析する枠組みとして、影山 (2005、2007、2009) が提案する結果述語の分類 (含意的普遍性の階層) を用いている。次の 3.1 節では、この結果述語の分類を導入したのち、Taniwaki (2006) による RVA の分析を見る。

3. 1 結果構文の分類と RVA

影山 (2005) は、動詞のクオリア構造³ の記載内容を検討し、さらにそれに基づいた結果述語の分類を提案している。影山 (1996、2001) では「本来的結果述語」と「派生的結果述語」の二分法が提案されていた⁴ が、クオリア構造を導入することで、結果述語をさらに細かく分類することが可能となる。

(15) 動詞のクオリア構造：

- a. 形式役割 (Formal role) = その動詞が表す事象 (eventuality) のタイプ (活動 activity、状態 state、過程 process、推移 transition)
- b. 構成役割 (Constitutive role) = その動詞の語彙概念構造 (LCS) (影山 (1996) で想定したような構造化された意味表示)
- c. 目的役割 (Telic role) = その動詞が本来的に含意する動作目的
- d. 主体役割 (Agentive role) = その動詞表現が成立するための前提 (presupposition) やフレーム (場面や背景状況)

(影山 2009: 109)

(16) 結果述語の分類⁵

³ クオリア構造はそもそも Pustejovsky (1995) によって提案された。(15) は、Pustejovsky による各クオリア (役割) の定義に従って、影山が動詞についてそれを規定し直したものである。本論で分析の枠組みとして用いる (16) の結果述語の分類は、(15) で規定するクオリア構造と共に提案されたものであるため、本論ではこれに従うことにする。

⁴ 影山 (2005、2007) では、(16) のⅡとⅢと (G) をまとめて「派生的結果述語」と呼んでいたが、影山 (2009) では (16) に示すように、(C) と (D) をまとめて「準本来的結果述語」とし、さらに (G) を「派生的結果述語」から除外している。どちらを採用しても、(A)～(F) および (G) の細分類については同一なので、これ以降の本文で言及する Taniwaki (2006) の分析および A-Ven 型複合形容詞の分析には影響しない。なお、前者の二分法における「本来的」と「派生的」の対立は、Washio (1997) が提案する “weak resultative” と “strong resultative” の対立などにおおむね対応する。ただし、Taniwaki (2006: 263) が整理するように、これらは完全に一致するものではない。また、Iwata (2006、2008) における Type B (Adjunct resultative, Verb-based resultative) と Type A (Argument resultatives, ASC [= Argument Structure Construction, 項構造構文]-based resultative) の対立もおおむねこれらの二分法に相当すると考えられるが、言語類型論的な分類ではなく英語の結果表現における分類である点で、他と異なる。

⁵ 影山 (2005: 67) は、辞書の知識を「言葉 (語彙) を用い理解する上で必要な知識であり、すべての話者について成立する」知識として規定しており、さらに「意味に限っていえば、辞書の知識すなわち辞書の意味とは、すべての話者にとって必ず論理的に含意される意味内容であり、文の真偽値の判断に有効な意味概念である」と述べる。また百科事典的知識を「その語が表す指示対象に関する知識であり、個々の話者や文化、社会において 100% 成立するとは限らない」知識として規定している。した

I. 本来的結果述語 (inherent resultatives) : 結果述語に当たる概念が主動詞の LCS に定項として指定されており、その論 理的含意によって認可される	(A) freeze solid タイプ：主動詞の LCS に変化結果が 記載され、しかもその主動詞の事象タイプが transi- tion である。 (B) wash clean タイプ：主動詞の LCS に変化結果が 記載されているが、事象タイプは process である。
II. 準本来的結果述語 (semi-inherent resultatives) : 結果述語の内容が主動詞のクオリア構 造の目的役割に含まれ、百科事典的含 意によって認可される	(C) wipe clean タイプ：主動詞そのものの LCS は ACT (ON) であるが、目的役割に対象物の特定の変 化結果を含む。結果述語は、その目的役割に示され た変化結果に対応。 (D) shake awake タイプ：主動詞は辞書表記として目 的役割を含むが、その中身が1つに特定されていな いので、慣習化の範囲内で様々な結果述語が可能。
III. 派生的結果述語 (derived resultatives) : 結果述語の内容が主動詞の語彙情報に 含まれず、語用論的含意によって推論 される	(E) kiss awake タイプ：主動詞は本来は目的役割を 持っていないが、意図的な状況において何らかの目 的役割がオンラインで作り上げられる。 (F) water the tulips flat タイプ：主動詞の行為・出 来事によって偶発的に生じる結果を表す。表現の範囲 が限られ、許容度も低い。
(G) cry one's eyes out タイプ：特定の動詞・目的語・結果述語の組み合わせに限られたイディオム。誇張表現と解釈されることが多い。	

(影山 2007: 43、2009: 110-111 に基づき作成)

(17) に、影山 (2007) から、G タイプを除く各タイプの例文を引用する。イディオムであると考えられる G タイプは、これ以降の議論では言及しない。

- (17) (A) He drained the glasses both dry. / They painted their house dark green.
(B) She washed the garments sparkling clean.⁶

がって、(16) の分類は、結果述語に当たる概念が、I では動詞の辞書的知識として、II では動詞の百科事典的知識としてそれぞれ記載されているのに対し、III ではそのいずれにも記載されていないということである。

⁶ 影山 (2005、2007) において、B タイプの結果述語として明示されているのはこの *wash clean* のみであるが、他に動詞 *sweep*, *comb*, *iron* などと現れる結果述語は、B タイプとみなすものと考えられる。A タイプの結果述語に現れる動詞 (事象タイプが transition) は状態変化を表し、変化結果の含意をキャンセルできず、完結アスペクトであるのに対して、B タイプの結果述語に現れる動詞は変化結果の含意をキャンセルでき、完結アスペクトと継続アスペクトの両方が可能である。以下、この脚注で示す例文はすべて影山 (2005: 93-95) からの引用である。

- (i) (A) a. *He killed the bug, but it was still alive.
b. *She cleaned the shoes, but they were still dirty.
(B) a. She washed the shirt, so it was clean/but it was still dirty.
b. She combed her wavy hair, so it was straight/but it was still wavy.

- (C) She scrubbed/wiped the floor shiny clean.
- (D) She shook her husband awake. / He pulled the drawer open.
- (E) The dog barked the neighbors awake. / The prince kissed the princess awake.
- (F) They watered the tulips flat. / They drank the pub dry.

また (16) は、単なる分類のみならず、言語類型論における含意的普遍性 (implicational universal) の階層としても想定されている。例えば影山 (2009) では、言語ごとに認められる結果述語のタイプが異なることを観察している。また、影山 (2007) では、単一の言語の中でも、結果述語の振る舞いに段階的な差異があることを示している。例えば英語では、階層が高いタイプ (A タイプに近い) ほど結果述語を抜き出しやすく、階層が低いタイプ (F タイプに近い) ほど結果述語を移動させることができないという。

- (18) a. It was dark green that they painted their house.
- b. ?? It was wide[sic] awake that she shook her husband.
- c. * It was flat that they watered the tulips.

(影山 2007: 55-56)

こうした結果述語の振る舞いの違いが、句や文の単位のみならず複合語の単位においても生じること示しているのが、Taniwaki (2006) である。この結果述語の分類に基づいて RVA を分析した Taniwaki (2006) によれば、本来的結果述語である A タイプと B タイプでは、RVA が容認される。

- (19) A タイプ :
 - a. Mother bleached white the shirt. (Taniwaki 2006: 266、下線は原文)
 - b. John drained dry the glass. (影山 2001: 174、下線は筆者)
- (20) B タイプ :
 - a. Cinderella swept clean the floor.

-
- c. He swept the floor, so it was clean/but it was still dirty.
 - d. He ironed my shirt, so it was smooth /but it wasn't smooth.
 - (ii) (A) He killed the bug {in a second/*for 10 minutes}.
 - (B) a. She washed the shirt {in/for} 10 minutes.
 - b. He swept the room {in/for} 30 minutes.

一方、これらの動詞は中間構文を形成できる (cf. (iii)) が、C タイプ以下の結果述語に現れる動詞は、結果述語を伴わなければ中間構文を形成できない (cf. (iv))。なお (iii) の例文は、影山 (2005) がインターネットから採集したものである。

- (iii) a. [baby fleece] Warm and soft, washed easily and dries quickly.
- b. [The cement floor] sweeps easily with a rubber tooth broom.
- c. [Shirt] 100% Cotton. Nice fabric. Irons easily!
- (iv) a. *This table wipes easily. / This table wipes clean easily.
- b. *That man knocks easily. / That man knocks down easily.

- b. ? The gatekeeper raked clear the path.
- c. ? Mary carefully combed smooth her hair.

(Taniwaki 2006: 266、下線は原文)

ただし、RVA として容認されるのは、形容詞が、動詞の LCS において結果状態を示す定項をそのまま明示 (“overt manifestation”) するものに限られる。例えば *paint white* や *dye black* などの組み合わせは、動詞 *paint*, *dye* の LCS における定項 〈*COLORED*〉が、色を表す形容詞 *white*, *black* によって表現されるが、それらは定項をさらに特定 (“further specification”) するものであってそのまま明示するのではない⁷。このため RVA を形成できないとされる。

- (21) a. *Father painted white the fence. (cf. Father painted the fence white.)
 - b. *Mother dyed black her hair. (cf. Mother dyed her hair black.)
- (Taniwaki 2006: 266、下線は原文)

また、派生的結果述語である E タイプと F タイプでは、RVA を形成できない。

- (22) *{tick/bark/shrill} awake somebody, *eat clean the plate, *drive clean the engine,
*sleep quiet the unborn baby, *dance sore one's feet, *sneeze soggy the handker-
chief, *cook black the kitchen walls
- (Taniwaki 2006: 271、下線は原文)

準本来的結果述語では、C タイプは RVA の形成が許される (cf. (23)) 一方で、D タイプはふつう許されない (cf. (24))。ただし *push*, *pull*, *throw*, *fling* などに代表される力の行使 (force exertion) を表す動詞と、*open*, *loose*, *free*, *clear* などの分離を表す形容詞との組み合わせや、音放出動詞と形容詞 *open/shut* との組み合わせであれば形成できる (cf. (25))。

- (23) C タイプ :
 - a. The kid licked clean the plate.
 - b. He pounded soft the {clay/meat}.
 - c. She sucked dry the orange.

(Taniwaki 2006: 267、下線は原文)
- (24) D タイプ :
 - a. *She shook awake her husband.
 - b. *The chef kneaded {soft/smooth} the dough.
 - c. *John hammered flat the metal.

⁷ この “further specification” と “overt manifestation” の対立と同様の概念は、都築 (2018) にも指摘がある。この後本文でも言及するように、都築は前者に相当するものを「付加詞疑似結果述語」(e.g., *paint green*, *cut thin/thick*)、後者に対応するものを「付加詞強調型結果述語」(e.g., *freeze solid*, *burn black*) と呼び、さらに A タイプの (形容詞) 結果述語を、他 B タイプ以下のいわゆる結果述語と区別すべきであると主張している。

- d. * The horses dragged smooth the logs.
(Taniwaki 2006: 267-268、下線は原文)⁸
- (25) a. John pushed open the door. (= (11)、Taniwaki 2006: 251、下線は原文)
b. The old man blew clear a pipe.
c. The prisoner jerked free his wrist.
d. John creaked open the school gate.
((b-d) は Taniwaki 2006: 268-270 より、下線は原文)

(25) のような RVA が許される理由を、Taniwaki (2006) は Force Dynamics Framework (Talmy 1988) に基づいて説明している。Taniwaki (2006) によれば、(25) のような動詞と形容詞の組み合わせによって表現される状況は、主語が強い意志を伴って目的語名詞句を元の位置から動かそうとする (“The subject tries to let out the object NP from the original position with a strong intent by the act of the verb.” (p.269)) ものであり、これは、Force Dynamics Framework において最も典型的な使役事象⁹とされる。Taniwaki (2006) はこのことが RVA の形成に関わっていると考察している。実際、このタイプの RVA は主語の意図が読み取られやすい場合には容認度が上がるようである (cf. (26))。また、形容詞だけでなく分離を表す不変化詞を含む句動詞も、RVA と同じ語順をとることができる (cf. (27))。

- (26) a. ? Jane wiggled loose her bad tooth.
b. Jane tried to wiggle loose her bad tooth.
(Taniwaki 2006: 269、下線は筆者)
- (27) a. laugh off the suggestion
b. drink away his troubles
(Taniwaki 2006: 269、下線は原文)

以上の観察をもとに、Taniwaki (2006: 272) は RVA が形成できる条件を次のようにまとめている。

- (28) a. The adjective is an overt manifestation of the constant represented in the LCS or the primary purpose represented in the Telic role of the verb.

⁸ (24a) にある通り、Taniwaki (2006) は *shake awake* が RVA としては認められないとしているが、都築 (2018) はこれを容認できるとするデータを示している。また Taniwaki (2006) は *hammer flat* を D タイプの結果述語とみなしているが、影山 (2009) はこれを C タイプの結果述語としている。ただし、(24c) に示されるように *hammer flat* は RVA としては成立せず、A-Ven 型複合形容詞 **flat-hammered* (Adams 2001: 94) も形成できない。

⁹ Taniwaki (2006) は明確に言及していないが、これは Talmy (1988) における “onset causing of action” を指すと考えられる。Talmy (1988: 57) はこの使役事象を “a stronger Antagonist that comes into position against an Agonist with an intrinsic tendency toward rest, and thus causes it to change from a state of rest to one of action” と規定し、例として (i) を挙げる。

(i) The ball's hitting it made the lamp topple from the table.

- b. The verb and the adjective express the most prototypical causal relationship in the Force Dynamics Framework or the verb expresses sound emission incidentally caused by the act.

では A-Ven 型複合形容詞の場合はどうだろうか。(28) の RVA の条件と同じように捉えることができるだろうか。次節では、影山の結果述語の分類に基づいて、A-Ven 型複合形容詞の形成可否を観察し、RVA と比較することで A-Ven 型複合形容詞の形成条件を考察する。

3. 2 結果構文の分類に基づく A-Ven 型複合形容詞の分析

まず A タイプは、コーパスから次のような例が見つけれられる。これ以降は例文において、適宜 A-Ven 型複合形容詞に下線を付す。

- (29) a. smooth-polished skis for snow-covered hills; and bookends, boats, and other lovely things.
(Corpus of Contemporary American English (COCA, Davies 2008-) , MAG)
- b. she slaps her left hand down on the table and clicks her clear-polished fingernails
(COCA, NEWS)
- c. I rode in July but still found plenty of solitude on the white-bleached cliffs and pine scented forests. (The iWeb Corpus (iWeb, Davies 2018))
- d. Spanish-speaking sailors open up the hatches, displaying ton upon ton of stiff-frozen tuna, glistening under a coating of ice crystals. (iWeb)
- e. Through the degrees, deepening Into its hell of ice. [...] The battery is alive — but like a lamb Trying to nudge its solid-frozen mother
(British National Corpus (BNC) , H8R)
- f. The owner was also uncompromisingly twentieth-century, a man of much the same height and age as McLeish but built like a string bean, with brown, short-cut hair and fashionable heavy horn-rimmed spectacles. (BNC, AB9)

また、先行研究において提示されていた次のような例も、このタイプの結果述語と言えらるう。

- (30) the thin-sliced ham, a white-painted wall, red-dyed hair (Yumoto 1991: 118)
- (31) a. In those few undertoned words of Grandcourt's she felt as absolute a resistance as if her thin fingers had been pushing at a fast-shut iron door. [G. Eliot, *Daniel Deronda*, 311]
- b. There were extensive lanes of short-cropped, fortified-green lawns ... [J. Bailey, *Bagged*, 170-1]
- (いずれも L & RH: 44 より)

ただし *white-painted*, *red-dyed* などの例があるように、形容詞結果述語が動詞の LCS における定項をそのまま明示するものでない場合でも形成できる。このような着色を表す動詞と色を表す形容詞結果述語の組み合わせは、形容詞結果述語が動詞の LCS における定項をさらに特定す

るものであって、これらは RVA を形成できない。

- (32) a. * Father painted white the fence. (cf. Father painted the fence white.)
 b. * Mother dyed black her hair. (cf. Mother dyed her hair black.)
 (= (21)、Taniwaki 2006: 266、下線は原文)

B タイプの結果述語も A-Ven 型複合形容詞を形成でき、次のような例が見られる。

- (33) a [c]lean-washed dress (Yumoto 1991: 118)
 (34) a. a slim dapper man stepped carefully down the clean-swept steps (BNC, EVG)
 b. Blurred chicken shapes dot the smooth-swept courtyard. (COCA, FIC)
 c. Therefore, if you use a WRP as your only finish, you may have to reapply it every three years or so, perhaps more frequently on new, smooth-planed wood, which will not hold as much preservative as old, weathered wood. (COCA, MAG)
 d. Smooth-sanded walnut tables, velvety to the touch, come from the sadly departed Myth restaurant, as do the modern green stained-glass partitions that help screen off certain areas of the long, narrow space. (COCA, NEWS)

C タイプも次の例が示すように A-Ven 型複合形容詞を形成できる。

- (35) the clean-wiped {table / mirror}, the {thin-pounded / flat-pounded} metal
 (36) a. With her clean-scrubbed face and khaki trousers, Susan Luff looks and sounds more like a suburban housewife than a prison inmate. (iWeb)
 b. a pile of clean-licked bones littering the ground below (iWeb)
 c. Judy Ryan, Grandmother's servant-girl, always had my dinner ready for me on the white-scrubbed table that stood against the wall ... [M. Laverty, *Never No More*, 15] (L & RH: 44)

しかし D タイプは A-Ven 型複合形容詞がほとんど容認されない¹⁰。

¹⁰ ただし、(38, 39) の例については容認できるとする話者もいた。また、コーパスから (i) のような例が見られるが、これらは行為とその結果状態を表す A-Ven 型複合形容詞ではなく、第二要素が名詞 + *ed* である複合形容詞だと考えられる。つまり、(ia) の *soft-hammered* は叩いた結果柔らかくなった状態ではなく、そのアップライトピアノが *soft-hammer* を部品として持つことを、(ib) の *smooth-dragged* は、引きずった結果滑らかになった状態ではなく、その釣り竿のリールが *smooth-drag* を備えていることを表すものと思われる。

- (i) a. Unique new gentle soft-hammered Upright now available in the Nord Piano Library. (iWeb)
 b. A sensitive, graphite rod, fitted with a smooth-dragged baitcaster that is spooled with 4- to 10-pound-test narrow diameter line (iWeb)

(40) a. *the open-pushed door
(cf. John pushed open the door. (Taniwaki 2006: 251、下線は原文))
b. *a clear-blown pipe
(cf. The old man blew clear a pipe. (Taniwaki 2006: 268、下線は原文))
c. *his free-jerked wrist
(cf. The prisoner jerked free his wrist. (Taniwaki 2006: 268、下線は原文))
d. *the open-flung door (cf. He/She flung open the door.)

(41) a. *the shut-slammed door (cf. He/She slammed shut the door.)
b. *the shut-banged door (cf. He/She banged shut the door.)
c. *the open-creaked gate
(cf. John creaked open the school gate. (Taniwaki 2006: 270、下線は原文))

(42) a. *ship-arrived packages (船で到着した荷物)
b. *slow-baked potatoes (ゆっくりと焼いたポテト)

(影山 1996: 120)

13

一方で RVA は、Force Dynamics Framework における使役事象として典型的な状況 (“The subject tries to let out the object NP from the original position with a strong intent by the act of the verb” (Taniwaki 2006: 269)) であれば形成でき、主語の意図が読み取れる文脈では容認度が上がる。

- (43) a. ? Jane wiggled loose her bad tooth.
b. Jane tried to wiggle loose her bad tooth.

(= (26)、Taniwaki 2006: 269、下線は筆者)

以上をまとめると、RVA と A-Ven 型複合形容詞の違いが浮かび上がる。すなわち、力の行使を表す動詞と分離を表す形容詞の組み合わせは、主語の指示対象（行為者）が動詞句の表す行為を意図して行うという典型的な使役事象を表す。この場合、RVA として現れることができる。しかし A-Ven 型複合形容詞は、形容詞的受身であって、基体である動詞の意味から行為や行為者が背景化されているため、行為者による意図的な行為を表す、力の行使の動詞と分離を表す形容詞の組み合わせとは整合しない。

最後に E タイプ、F タイプの結果述語であるが、これらも A-Ven 型複合形容詞を形成できない。この点は A-Ven 型複合形容詞と RVA とで共通している。

- (44) a. *the awake-barked neighbors, * the awake-kissed princess, * his clean-eaten plate
b. *the flat-watered tulips, * the dry-drunk keg, * his ragged-run sneakers, * his sore-danced feet, * his soggy-sneezed handkerchief

以上の観察を、Taniwaki (2006) の RVA の観察と合わせて (45) に整理する。

- (45) 結果構文の分類および RVA、A-Ven 型複合形容詞の形成可否

-
- (i) a. *the hit boy, *the taken money
b. the repeatedly hit boy, the illegally taken money

(Yumoto 1991: 112)

- (ii) #constructed furniture; but carefully constructed furniture

(Ackerman and Goldberg 1996: 22)

結果構文の分類 (影山 2005、2007、2009)		RVA (Taniwaki 2006)	A-Ven 型複合形容詞
I. 本来的	A (<i>paint white</i> タイプ)	*	✓
	A (<i>bleach white</i> タイプ)	✓	✓
	B	✓	✓
II. 準本来的	C	✓	✓
	D (<i>push open</i> タイプ)	✓	*
	D (<i>shake awake</i> タイプ)	*	*
III. 派生的	E	*	*
	F	*	*

(46) A-Ven 型複合形容詞と RVA との違い

- RVA は、形容詞結果述語が、動詞の LCS における定項をそのまま明示するもの (e.g., *bleach white*) でなければならない。一方 A-Ven 型複合形容詞は、形容詞結果述語が、動詞の LCS における定項をさらに特定するものである場合 (e.g., *paint white*) も形成できる。
- RVA は動詞と形容詞結果述語が Force Dynamics Framework において典型的な使役事象とみなされる場合 (e.g., *push open*) であれば形成できる。一方 A-Ven 型複合形容詞は形成できない。

結果述語のタイプについて、影山の提案する動詞のクオリア構造 (cf. (15)) を前提とすると、A タイプと B タイプは、動詞の構成役割 (LCS) に変化結果が定項として記載され、形容詞はその変化結果を表すものである。また、C タイプは、動詞の目的役割に対象物の特定の変化結果が記載され、形容詞はその変化結果を表すものである。これらの結果述語は、A-Ven 型複合形容詞を形成できる。一方、目的役割として変化結果の記載はあるものの特定の一つに絞られない D タイプ、そもそもクオリア構造において変化結果に関わる内容が記載されていない E タイプと F タイプでは、A-Ven 型複合形容詞を形成できない。

したがって、A-Ven 型複合形容詞の形成条件は次のようにまとめることができる。

(47) A-Ven 型複合形容詞の形成条件：

動詞のクオリア構造 (cf. (15)) において、構成役割 (すなわち LCS) または目的役割のいずれかで対象物の特定の変化結果が指定され、形容詞がその変化結果を表すこと

さらに、A タイプ (e.g., *paint white*, *bleach white*) と一部の D タイプ (e.g., *push open*) を除けば、A-Ven 型複合形容詞と RVA の形成可否の分布はおおむね同一であると言える。この点について、以下で補足する。

まず A タイプの形容詞結果述語について、都築 (2018) は、これを「付加詞疑似結果述語」と「付加詞強調型結果述語」にさらに細かく分けたうえで、前者は副詞性が高く (cf. (48, 49)), Washio (1997) が提案した疑似結果構文 (spurious resultative) であると考えられること、後者は通言語的な分布が限られるため結果述語の含意的普遍性の階層に従わないことから、A タイプを他 B タイプ以下のいわゆる結果述語と区別している。

- (48) He cut the meat thick/thickly/thin/?thinly. (Washio 1997: 17)
 (49) Q : How did Mary dye her hair?
 A : She dyed her hair very pink on top and gold on side. (都築 2018: 212)

次に一部の D タイプ (e.g., *push open*) の RVA について、Nagano and Shimada (2009) はこれが句動詞 (particle verb, e.g., *pull off*) の一種であるとして、他の RVA (e.g., *bleach white*) とは区別している。*push open* タイプの RVA は結果状態の含意をキャンセルできる点、動詞 *finish* と共起できる点で句動詞と同じ振る舞いをするが、その他の RVA (e.g., *bleach white*) はこれらの特徴を持たない。

- (50) a. *John pulled off the leeches, but they still stuck to him.
 b. *John pushed open the heavy door open[sic], but it didn't move.
 c. John bleached white the shirt, but the stain remained.
 (Nagano and Shimada 2009: 91)
 (51) a. John finished pulling off the leech.
 b. John finished pushing open the heavy door.
 c. *John finished bleaching white the shirt.
 (Nagano and Shimada 2009: 91)

これらに従って、結果述語から A タイプと一部の D タイプ (e.g., *push open*) を除外すると、A-Ven 型複合形容詞と RVA の分布は合致する。すなわち、B タイプと C タイプのみ、これらの複合形式を形成できる。このことは、両複合形式の形成メカニズムが同一である可能性を示唆している¹²。

以上本節では、Taniwaki (2006) による RVA の分析を参考に A-Ven 型複合形容詞を分析し、二つの複合形式を比較することを通して、A-Ven 型複合形容詞の形成条件を明らかにした。

4. おわりに

本論では、英語の A-Ven 型複合形容詞について、結果構文および RVA との関連に着目して分析を行った。その結果、影山が提案する動詞のクオリア構造 (cf. (15)) に基づいた、次に示すような A-Ven 型複合形容詞の形成条件が明らかになった。

- (52) A-Ven 型複合形容詞の形成条件：
 動詞のクオリア構造 (cf. (15)) において、構成役割 (すなわち LCS) または目的役割のいずれかで対象物の特定の変化結果が指定され、形容詞がその変化結果を表すこと

¹² Taniwaki (2006) は RVA がレキシコンで形成される複雑述語 (complex predicate) であるとする一方で、Nagano and Shimada (2009) は *bleach white* タイプの RVA を対応する結果構文から語彙化したものだとしている。

また Müller (2006) や Müller and Wechsler (2014) はドイツ語の結果述語を例に、結果述語は語彙規則によってレキシコンで作られるとしている。しかし、こうした説明と、英語の結果述語の抜き出し可能性に段階的な差があるという影山の観察 (cf. (18)) とが、果たして整合するかどうか、疑問が残る。

(= (47))

他動詞であっても形成可否が異なる例 (e.g., *white-scrubbed*, **flat-watered*) は動詞の項構造のみでは説明することができなかったが、(52) として動詞の辞書的／百科事典的意味を考慮すれば説明できることになる。さらに、A-Ven 型複合形容詞の形成可否を整理した (45) は、この語形成が影山 (2009) の提案する結果述語の含意的普遍性の階層に従うことを示している。すなわち B タイプ・C タイプの結果述語は A-Ven 型複合形容詞を形成できるが、D タイプ以下では形成できない。A-Ven 型複合形容詞は、結果述語の抜き出し可能性や RVA と合わせて、英語という単一言語内における結果述語の含意的普遍性の階層を示す証拠であると言えるだろう。

引用文献

- Ackerman, Farrell and Adele Goldberg (1996) Constraints on Adjectival Past Participles. In: Adele Goldberg (ed.) *Conceptual structure, discourse and language*, 17-30. Stanford: CSLI Publications.
- Adams, Valerie (2001) *Complex Words in English*. New York: Routledge.
- Booij, Geert (2009) Lexical Integrity as a Formal Universal: A Constructionist View. In: Sergio Scalise, Elisabetta Magni and Antonietta Bisetto (eds.) *Universals of Language Today*, 83-100. Dordrecht: Springer Netherlands.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives. *Linguistic Inquiry* 23(2): 173-234.
- Davies, Mark (2004) British National Corpus (from Oxford University Press). <https://www.english-corpora.org/bnc/>.
- Davies, Mark (2008-) The Corpus of Contemporary American English (COCA). <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Davies, Mark (2018) The iWeb Corpus. <https://www.english-corpora.org/iWeb/>.
- Huddleston, Rodney (2002) The clause: complements. In: Rodney Huddleston and Geoffrey K. Pullum (eds.) *The Cambridge grammar of the English language*, 213-321. Cambridge: Cambridge University Press.
- Itoh, Takane (1985) On incorporation of predicative expressions in verbal compounds. *English Linguistics* 2: 21-41.
- Iwata, Seizi (2006) Argument resultatives and adjunct resultatives in a lexical constructional account: the case of resultatives with adjectival result phrases. *Language Sciences* 28: 449-496.
- Iwata, Seizi (2008) A Door that Swings Noiselessly Open May Creak Shut: Internal Motion and Concurrent Changes of State. *Linguistics* 46: 1049-1108.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (2001) 「結果構文」 影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』 154-181. 東京：大修館書店.
- 影山太郎 (2005) 「辞書の知識と語用論の知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて—」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム 1』 65-101. 東京：ひつじ書房.
- 影山太郎 (2007) 「英語結果述語の意味分類と統語構造」 小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』 33-63. 東京：ひつじ書房.
- 影山太郎 (2009) 「語彙情報と結果述語のタイポロジー」 小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』

- 101-139. 東京：ひつじ書房.
- Langacker, Ronald (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press. (山梨正明 (監訳)『認知文法論序説』東京：研究社)
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantic Interface*. Cambridge: MIT Press.
- Müller, Stefan (2006) Phrasal or Lexical Constructions? *Language*, 82(4): 850-883.
- Müller, Stefan and Stephen Wechsler (2014) Lexical approaches to argument structure. *Theoretical Linguistics* 40(1-2): 1-76.
- Nagano, Akiko and Masaharu Shimada (2009) English [V-A]_V forms and the interaction between morphology and syntax. *Mediterranean Morphology Meetings* 7: 78-97.
- 小野尚之 (2012) 「結果構文の意味論」澤田治美 (編)『構文と意味』89-106. 東京：ひつじ書房.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge: MIT Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. Edinburgh: Longman.
- Randall, Janet (1981) A Lexical Approach to Causatives. *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics* 7: 184-211.
- Roeper, Thomas and Muffy Siegel (1978) A Lexical Transformation for Verbal Compounds. *Linguistic Inquiry* 9(2): 199-260.
- Talmy, Leonard (1988) Force dynamics in language and cognition. *Cognitive Science* 12: 49-100.
- Taniwaki, Yasuko (2006) Resultative Verb-Adjective Combinations as Lexical Compounds. 影山太郎 (編)『レキシコンフォーラム 2』251-280. 東京：ひつじ書房.
- 都築雅子 (2018) 「結果構文のプロトタイプと疑似結果述語」『日本英文学会第 90 回大会 Proceedings』211-212.
- Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1-49.
- Yamada, Yoshihiro (1987) Two Types of Resultative Construction. *English Linguistics* 4: 73-90.
- 幸一尋 (2024) 「英語における形容詞＋動詞-en 型複合形容詞の形成条件—結果構文との関連から—」『日本言語学会第 169 回大会 要旨集』107-108.
- Yumoto, Yoko (1991) The Role of Aspectual Features in Morphology. *English Linguistics* 8: 104-123.

(ユキ カズヒロ・北海道大学大学院 文学院人文学専攻 言語科学研究室 修士課程 2 年)